令和４年度
音声教材普及推進会議
音声教材を使用する学校等による事例発表

学級経営を含めた音声教材の活用

～ＧＩＧＡスクール構想前の平成29年度から継続して取り組んでいる実践事例から～

京都府総合教育センター特別支援教育部
主任研究主事兼指導主事　長谷川法子
研究員　佐藤雄太

はじめに

【テーマ】 読み書き困難（通常の学級に在籍） × ＩＣＴ活用

通級指導教室を軸とした指導 → **通常の学級でも活用**

1 平成28年度

2 平成29年度

3 平成30年度

4 令和元年度

5 令和２年度

6 令和３年度

※令和２年度は令和３年度に収録

小学校の事例

A児のアセスメントと支援方針

検査結果（STRAW-R／WISC-Ⅳ等）

【読　み】スムーズかつ正確に読むことが難しい。
【書　き】遅いが正確に書くことはできる。
【その他】知的な遅れは認められない。資料集等（文字・図・写真が細かく掲載）が見にくい。

学習の状態

読むことで精一杯になるため、文章の内容理解にたどり着かない。
板書の書き写し等で遅れがちになり、教師の発問等が聞けなくなる。

→タブレット端末の活用へ

①読むことへの支援：音声教材の活用や代読で、読むことから聞くことへシフト
②書くことや見ることへの支援：カメラ機能を活用して書くことの軽減や見ることの補助

小学校の事例

音声教材の活用（読むことへの支援）

使用教材

AccessReading（Word版）の国語、算数、社会を保護者が申請

使用機器

Windows系のタブレット端末

※当時は読み上げ機能が付いていなかったので、無料の読み上げアドインソフトをインストールして使用

その他

音声教材やタブレット端末の使い方等は通級指導教室でも指導・練習

小学校の事例

音声教材の活用（読むことへの支援）

国語の授業

指定された範囲を自分で読んで答える場面等で活用

　例：「ここからここまでを読んで主人公の心情を考えましょう」

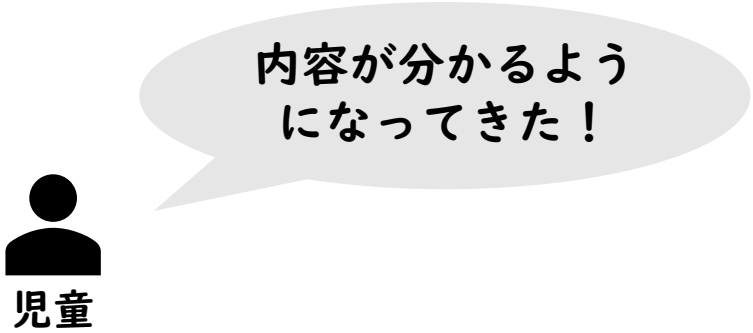
算数の授業

文章を読んで立式したり問題を作成したりする場面で活用

家庭学習

国語の音読の宿題

社会の歴史の単元の予習（新出単語が多いため）



小学校の事例

テスト（読むことへの支援）

テストの代読（４～６年生時）

テストは担任等が代読で実施

児童

自分で読むより
分かりやすい！

テストの読み上げ（小学校卒業前）

中学校、高等学校への進学に向けて、卒業前には代読ではなくタブレット端末とイヤホンを使い、機器による読み上げへ移行

※テストデータは担任が作成

小学校の事例

カメラ機能の活用（書くこと・見ることへの支援）

板書の撮影

板書をノートに書き写す作業が遅れるため、教師の指示や発問等を聞きのがしたり、問題を解くために考えたりする時間が減る。

→ノートに書き写す作業が減ったことで、話を聞くことに集中でき、考える時間も増えた。

資料集等の撮影・拡大

資料集等、文字が小さく、情報量の多い教材は見にくい。

→自分で写真を撮って手元で拡大して表示することで見やすくなった。

小学校の事例

セルフアドボカシー（自己権利擁護）に向けて

物的環境を整備するだけではなく

- 活用当初、本人は「いいな」と感じていても、「クラスの中でみんなと違うことはやりたくない…」「ずるいって言われるかも…」と、クラスの中での活用には消極的だった。
- 小学生にとっては、当初からなぜ自分が音声教材等を使って学んでいるのかを理解してから使い始めるのは難しい。

担任が代わっても
使い続けられるだろうか。

いずれ、「これを使わせて欲しい」と自分から
言えるようになってほしい。

担任

早い段階から「自分は何に困っているのか？」「どうしたら解決できるのか？」ということを考える経験は、自己理解において非常に重要なこと。→合理的配慮の申し出へ

小学校の事例

集団の中で使えるために　～学級経営の重要性～

タブレット端末を使って学習している様子を見た他の児童が…

「あなたには必要ないでしょ。これは〇〇君だけ。」等、使用を個人に限定しなかった。

困難の有無に関わらず、全員の「やってみたい」という気持ちを大事にする。
やってみて「やりやすい」と実感すればそのまま続けるし、「合わない」と感じたら紙に戻る。

→学びの主体は児童生徒、学び方を選ぶのも児童生徒
→多様な学び方の尊重、多様性を認め合うことにも繋がる。

自己理解に向けて

日常的な言葉掛け

コミュニケーションの機会を増やし、日常的な何気ない会話の中でうまくいった要因、うまくいかなかった要因を言語化し、フィードバックする機会を設けた。

手応えのあるもので効果を確認

Ａ児にとって最も分かりやすく効果が確認できるのはテストの点数だった。同程度の内容・難易度の２つのテストを、一方は自読、一方はタブレット端末で読み上げて実施した。

→読み上げの方が高得点

→比較することで「なるほど、こっちの方が自分には合っているんだ。」と理解

※どちらの方が取り組みやすかったのか等も聞き取り、自己理解に繋げた。

小学校の事例

本人を取り巻く様々な人への共通理解を生むために

学級全体の保護者

「人間の多様性」「多様な人が共に暮らすための工夫」をテーマとした理解学習を授業参観として実施

クラスの保護者も一緒に多様性について考える機会とした。

学習指導案等はこちら

進学先の中学校

丁寧な引継ぎを行った結果、中学校でも次のようなことを実施した。

・AccessReadingの申請（学校が全教科）

・教職員研修（教材データの共有について、機器の使い方について　等）

・他学年生徒への理解学習

音声教材含むＩＣＴ活用を通して（効果）

読み書きに対する負担の軽減

「苦手な作業（読み書き）」に注ぐエネルギーを「考える」ことに充てることができた。

意欲

本人の「分かる」「楽だ」「便利だ」という実感が「もっと使いたい」「これなら自分にもできる」という意欲に繋がった。

正当な評価と自信

自分に合った学び方（授業やテスト等）で取り組んだ結果、点数が上がり、成績も向上した。

正当な評価を得られたことで自信にも繋がった。

音声教材の有効性

読むことが困難な児童生徒にとって、聞くことができる音声教材は、大変効果が大きい。
特に、テスト等個々に取り組む場面においては、自分のペースで進めることができる。

もう１回読んで欲しいけど、
お願いしても大丈夫かな…

代読（人に頼る）だと代読者を配置するだけでなく、その人との人間関係も必要になってくるため、本人に余計な心理的バイアスがかかる。

人に頼れることも大事だが、機械にも頼れると更に良い。
※自分の特性に合わせてカスタマイズができる。
※いつでも、どこでも、自分のペースで、遠慮なく学べる。

自分に合う音声教材は人それぞれ

音声教材は６種類あり、それぞれ特徴が異なる。

使用する児童生徒も多様で、どれが合うのかは人によって異なるため、試してみないと分からない。

→複数の音声教材を試用することも大切！

【京都府内での一例】

「マルチメディアデイジー教科書」※1と「ペンでタッチすると読める音声付教科書」※2の２種類を通級指導教室で複数の児童が試用

→Ａ児「タッチペンはめんどくさい。デイジーは楽だからこっちがいい。」

→Ｂ児「デイジーよりタッチペンの方が楽しいからこっちがいい。」

※１：学校が申請した。

※２：京都府総合教育センターが所有しており、希望する学校に試用で貸出しを行っている。（茨城大学と連携済）

研究を通して分かったこと③

音声教材は個別の場で更に効果を発揮

授業中

個人で読む活動

テスト

問題文を読む時

家庭学習

宿題や予習等

音声化してくれるツールとしてより必要性が増す！

改めて意識したいこと

まとめ

学びの主体は児童生徒（学ぶ権利の保障）

「一律な」学び方から「個に応じた」学び方へ（個別最適な学び）

原点に立ち返る（何のために学ぶのか？学習のねらいは何か？）

御清聴ありがとうございました

京都府総合教育センター
ホームページ（ITEC）

ＩＣＴと共存し

より楽に（負担を軽減して）学び

自信をもって

夢や希望のある人生を